

[シンポジウム報告 講演②]

東京2020パラリンピックの成功へ向けて 共生社会実現への道



公益財団法人日本障がい者スポーツ協会常務理事・日本パラリンピック委員会副委員長

高橋 秀文

高橋でございます。冒頭に二つお礼を申し上げて、本題に入りたいと思います。私、今、ご紹介の中にはございませんでしたが、実は、東京ガスという会社から出向しております、日頃、東京ガスが大変皆さまにお世話になってると思います。まず、お礼を申し上げたいと思います。なんで東京ガスが来てこういうことをやってるのかというと、「日本障がい者スポーツ協会」、そして、「日本パラリンピック委員会」というのは、健全者のほうは、「日本スポーツ協会」と、「日本オリンピック委員会」が別の公益財団なんですけども、私どもの世界は、障がい者スポーツ協会の中に、日本パラリンピック委員会が内部組織としてございますので、同じ組織なんです。したがって、会長が同じ人で、内部組織ですから同じ人で、鳥原と申しまして、東京ガスの社長、会長経験者でございます。そうした意味で、私も東京ガスから出向して、また、千葉においても、東京ガスの千葉支店をはじめとして、東京ガスがパラリンピックを全面的に支援させていただいておりますので、そうした意味で、いろんな所でお目にかかっていると思います。お世話になってると思います。ありがとうございます。

もう一つ。僭越ですけども、今、貞石さん

がいろいろお話しされました。千葉市の方々。熊谷市長、この後、お見えになるとうかがっておりますが、大変お世話になっております。お世辞じゃなく、千葉市は私が知る限り、全国の中で一番パラスポーツに理解があり、かつ、具体的な行動をされている市だと思います。一番だけ言うと、さも持ち上げているようですので、二番を申し上げますと、私から見ると、東京にあります渋谷区が二番目に熱心です。それはやはり、試合会場を多く持っているということもございまして、区長さんですね。向こうは渋谷区の区長さん、長谷部さん。よく渋谷の交差点の所でワッと騒ぐときに、これ、今後どうするんだっていう、区長さん出てらっしゃいますね。博報堂出身の、民間出身の区長さんであります。熊谷さんも民間出身の市長さんでございます。

いずれにしても、ものすごくご理解いただいて、あれだけの活動をワッとやられている行政って、なかなかないんです。名前は言いませんけど、昨日、他の、神奈川県のある市にお呼ばれして、市長さんとも一緒でしたけども、とても千葉市さんのことを申し上げることができないぐらい、こちらが進んでおります。決してお世辞じゃございません。いろいろお世話になっております。千葉市の職員

の方々、3回に分けて講演をさせていただきました。また、熊谷市長のご要請で、千葉市議会50人の方のうち49人がご参加された、49人の方の前でも講演させていただいたりしております。経済協議会でも機会をいただきました。普通90分でやらせていただくところを、今回、お時間の関係で6分とうかがっておりますので、少し端折りながら、早口でお許しをいただきたいと思います。

前置きはこのぐらいに言いながら、もう一つだけ申し上げたいことがあります。東京ガスに入社して、ずっと会社生活をしてたんですけども、この世界に来たのは2015年の4月なんです。それまで東京ガスで、ずっと仕事をしておりました。今も出向ですから、東京ガスから給料もらっているわけです。これから、もう1時間を切りましたが、ベラベラ、いっぱい、障がい者の人のことが分かっているような話をします。パラスポーツの話もいっぱいしますが、私、2015年の3月まで障がい者の人と仕事したこと、一度もありません。東京ガスには障害のある人、いっぱいいらっしゃいますけども、私は、残念ながら、障害のある人と一緒に仕事をしたことはございません。それから、2015年の3月まで障がい者スポーツ、見たことがありません。パラスポーツも見たことはありません。

したがって、今日お話しする内容は、しょせん3、4年の間の話。東京ガスにいたときは、私、役員もやらせていただきましたけれど、私の頭の中にあるのは、安心と安全でお客様の生活をお守りするのに加えて、売り上げ、利益、費用対効果、コストダウン、他社との差別化ですから、それは、しょうがないですよ。サラリーマンですから。それだけやってたんです。それが、2015年の4月にガラッと変わって、共生社会ですからね。ある大きい会社さんに絶対負けないうんて、やってたのに、そういう会社さんとも仲よく一緒にやりましようって話ですから、なかなか切り替わらないんですけども、3、4年であつという間にしゃべれるようになりました。

なぜか、それは、私、今思うと、マザー・テレサだと思ふんです。マザー・テレサは、「愛の反対は憎しみではない。愛の反対は無関心である」とおっしゃった。私は、東京ガスに入って、2015年3月まで、障がい者に対し

て、全く無関心。したがって、愛情の湧きようもないし、パラスポーツ、障がい者スポーツ、見たことがないですから、全然、愛情湧きませんでした。ところが、今、それ以来の3、4年で、もう毎日のように一緒ですから、もう関心あるとかの問題じゃなくて、一緒にやっていますから。そうした意味でも、ああ、もっと早く知り得たなと思いました。今日は、わざわざこういう土曜の日に、100人の方がお見えになってる。こちらの方は、もう皆さん、パラスポーツや障がい者スポーツに関心があるからお集まりなんだと思いますけれども、今日、私は二つのことを皆さまがたにお伝えできて、60分の講演が終わればいいなと思っています。

一つは、パラスポーツに対して、ますます関心を持っていただく。今までも関心をお持ちだからお見えになってると思いますけど、さらに関心を持っていただくことができればいいなと思います。それが一つ目。二つ目は、共生社会への関心を、今日まで、昨日まで以上に持っていただければうれしいと思って、お話をさせていただきます。

なお、もう一つだけお断りして映像を6分間見ていただきますけども、私、パラスポーツと申し上げます。今の貞石さんの資料も、みんな、パラスポーツと書いてあり、大変ありがたいです。熊谷さんと2015年にお目にかかったときに、最初にお願ひしたのが、この「パラスポーツ」という言葉なんです。「障がい者スポーツ」とずっと呼んでたんですよ。私、2015年の3月に、うちのトップの鳥原に、「障がい者スポーツ協会」に行つて、そして、東京パラリンピックを成功させろというふうな、鳥原は常駐していませんので、常駐して成功させるために頑張れと言われたときに、障がい者の人と働いたことないし、障がい者スポーツを見たこともない私は、障がい者スポーツ協会って聞いたときに、随分、暗い世界に行くんだなと思った、正直。障害を持ったかわいそうな人がやる特別なスポーツの世界に行けて言われたのかなと思いましたね。ところが、こっちに来てみたら、全然、そうじゃないから、今、ベラベラしゃべりますけど、まず一番大きな印象として、障がい者スポーツっていう言葉が暗い。それがイメージを作っちゃってるんじゃないかと思ったんで、

パラスポーツという言葉にしよう。マスコミの人にもお願いしていますから、今、マスコミの人、パラスポーツって書くことが多くなりました。

ただ、行政は駄目なんです。法律で障がい者スポーツって決められているので、行政では障がい者になります。そうじゃなければ、パラスポーツ。熊谷さんも、「それは、そうですね。高橋さん、暗いよね。障がい者スポーツ」って、はっきりおっしゃいました。だから、「パラスポーツフェスタちば」とか、こう書いていただいていると思います。今日、私がパラスポーツと言ったときは、パラリンピックスポーツではございません。障がい者スポーツのことでございますので、ぜひ、ご理解いただきたいと思います。

長くなりました。次のページ行きたいと思えます。私ども、今日は敬愛大学で、学生さんは少ないですけど、早稲田大学とか上智大学とかでも学生さんと話すとき、最初に言います。もし学生さんにテストをして、日本パラリンピック委員会は何するところだという問題が出たときに、東京パラリンピックでたくさんメダルを取るところって書いたら、不合格ということになりますよと。そういうところではない。それは、手段。

目的は、この三角形。スポーツの普及拡大。パラスポーツ普及拡大。障害のある人、みんな外へ来て、体育館でもいいんですけど、家から出てスポーツ楽しみましょうよという横軸。斜め軸、競技力の向上。これは、分かりやすく言うと、パラリンピックでメダルを一番多く取るとかですね。ここで出てくる三角形を、どんどん大きくして、この面積大きくして右のほうに持っていく。私どもの目的は、活力ある共生社会の実現です。東京パラリン

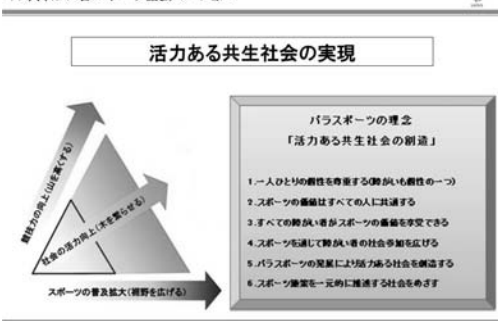
ピックは、そのための手段で、かつ最大の契機というふうに、チャンスという位置付けでございまして、活力ある共生社会の実現、これが、私どもの協会の目的ですね。

目的が共生社会なんですけど、共生社会の意味なんですけど、もう、こちらの方はご存じかと思えますけど、障害のある、なしに関係なく、男性女性に関係なく、国籍や民族に関係なく、年齢に関係なく、みんな、一人ひとりが自分の個性を生かして、生き生きと生きられる社会。それを共生社会と呼んでおります。障害も個性の一つだと我々は位置付けていて、そして、その障害のある、なしに関係なく、みんなが生き生きと生きられる社会にしたいと思っております。

これでも堅いので、私は、共生社会を一言で言いなさいと言われてたら、みんな違って、みんないい社会だと答えます。私の年齢では、小学校のときからずっと、みんなと同じがいい社会。みんなと同じように、違ったことしちゃいけないというふうに教わってまいりました。今の若い人はどうでしょうか。みんなと同じがいい社会にこれからもするのか。みんな違って、みんないい社会にするのか。これが、パラリンピックの前と後の差だと思うんです。これができなければ、パラリンピックって、メダルをいくつ取ったって、あまり、それは大きい意味はありますけど、それだけにしてもったいないっていう話を、後ほど申し上げます。みんなと同じがいい社会なのか、みんな違って、みんないい社会なのか。ここが、キーワードだと思っております。

次に、こんな話ばかりじゃつまらないので、今から6分間、映像を見ていただきます。国際パラリンピック委員会というところが作った、夏と冬、東京は夏ですけども、夏と冬のパラリンピックのプロモーション映像でございます。英語で失礼します。英語ですが、そんなのはどうでもいいんです。見ていただきたいのは、たった一つ。選手たちです。選手たち、こう、ずっと見ていただくと、この選手、どこに障害があるか分かんないなって。健常者みたいだねって。健常者の人は、パラリンピックには出られませんので、間違いなく、どっかに障害のある選手たちが出てまいります。6分間でございます。ちょっとお付き合いいただいて、ご覧いただきたいと思いま

日本障がい者スポーツ協会のビジョン



Copyright © 2018 Japanese Paralympic Committee. All Rights Reserved.

す。では、お願いします。

(映像)

高橋 ご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、パラスポーツの世界、いかがだったでしょうか。障害を持った人がやるということは間違いありません。特にこれ、パラリンピックですから。でも、障害を持ったかわいそうな人がやる特別なスポーツですかね。かわいそうじゃないんですよね。彼ら、障害を乗り越えて明るく頑張っているから素晴らしいし、特別なスポーツじゃないということ、後で少し申し上げますが、例えば、車いすバスケットっていう競技があります。バスケットのコートの大きさは、健常者と同じですし、ボールを入れるリングも、3m5cmって高さも同じ。全部同じで、唯一、車いすでやるか、走ってやるかっていう違い。一つだけ、ダブルドリブルが認められているっていう、細かいルールの差は、ちょっとありますけど、基本的には同じなんですよ。だから、障害を持った人がやることは間違いなく、パラリンピックはかわいそうな人の大会ではない。特別なスポーツではない。だから、ヨーロッパでは、この大会、このスポーツのことを、エリートスポーツと呼ぶというのをこちらに来てから知って、そうだなというふうに、よく思います。

このパラスポーツの世界を一言で言うと、世界中の誰もが知っている言葉「失われたものを数えるのではなく、残された機能を最大限生かす」です。大学の授業ふうに言えば、これが書けなければ、合格点はあげられません、学生さんに。失われたものを数えるのではなく、残された機能を最大限生かして頑張っている姿。具体的に3人の例を本当は言いたいんですが、時間の関係で少し端折りながら、ご紹介します。次の画面をご覧ください。

この3人は、昨年3月、ピョンチャンで行われた冬のパラリンピックですね。冬のパラリンピックで、金メダルを取った日本の3選手です。皆さんから見て左側は、村岡桃佳選手。彼女は、4歳のときに原因不明の横断性脊髄炎という病気にかかって、足が動かなくなりました。お父さんが、何とかスポーツをさせたっていうことで、子どもの頃から雪が大好きだったようですから、山へ連れてって、チ

ェアスキーという、いすに座ってやるスキーを始めました。早稲田大学は、1年に3人だけ。スポーツもできて、勉強もできる学生をとりませんが、彼女は勉強もできましたので、そのうちの1人に選ばれました。パラスポーツの世界から初めて選ばれた村岡桃佳選手は、早稲田大学3年生で、体育会スキー部をバックにしながら、ピョンチャンで金メダルを取りました。

皆さんから見ると一番右側。彼は、成田緑夢（ぐりむ）君っていいまして、ご存じの方も多いかもありません。成田三兄弟の一番下。お正月の番組で、やたらルックスがいいもんですから、タレントのように、芸能人のようによくテレビにも出ていました。一番右のお父さんは厳しく、3人ともオリンピック選手にしようとしていた2013年、緑夢君はお父さんが練習をさせていたトランポリンで上からドンと落っこって、左足を大けが、両親とすぐ病院に運ばれたときに、左足の切断を覚悟してほしいと両親に言われたそうです。そして、切断を免れても、スポーツができる確率は2割と。ましてや、オリンピック・パラリンピックなど論外です。そのときは、オリンピック目指していましたが、パラリンピック目指すようなこともお医者さんには難しいと言われたんです。しかし、彼はそれを乗り越えてパラリンピックまで出てって、金メダルを取りました。今日、一番申し上げたいのは、みんな、失われたものを数えるのではないということですよ。村岡選手だと、失われたのは両足の機能。成田選手は左足の機能。それを数えるんじゃなくて、残されたもので精いっぱい頑張って金メダルを取った。

真ん中の選手、新田佳浩選手について、申し上げたいと思います。新田選手は3歳のときに、おじいちゃんが運転していた脱穀機に左手を挟まれて、ひじから下を切断しました。おじいちゃんは、それをずっと悔やんでいて、「俺の左手を孫に付けてやってくれ」と言い続け、亡くなったそうです。そうした新田選手ですが、そのおじいちゃんのごことが大好きで大好きで喜ばせたいと、2010年、カナダのバンクーバーで行われたパラリンピックにクロスカントリースキーという、スキーの冬の馬拉ソンみたいな競技に出まして、金メダルを取って、日本に戻ってきました。2010年の金

メダルをかけてるおじいちゃんの写真を見せていただきましたけれども、おじいちゃんは田舎の人で、写真のスーツ姿は、スーツを着たことがないんじゃないか、ネクタイを初めて着けたんじゃないかって思うほど、ネクタイが結べてないどころか、曲がっていましたが、ニコリともせず、金メダルをかけてもらっておりました。それから間もなく、おじいちゃんは亡くなりました。新田選手は2014年のロシアのソチパラリンピックにもこの競技に挑みましたが、メダルは取れませんでした。なぜか。おじいちゃんに金メダルをかけたいという、その目標だったおじいちゃんが亡くなっていたんで、目標がなくなっちゃったんですよ。

その新田選手、ソチから成田に戻ってきたとき、迎えにきた人がいました。新田選手の2人の男の子。「パパ、お疲れさま」と言って、紙で作った金メダルを新田選手にかけました。それを見た新田選手、今度は子どものために頑張ろうと思いました。でも、彼はそのとき33歳。もう引退も覚悟していて、4年後っていうと37歳になっちゃうわけです。この競技は体力が必要なんで、すごくつらいんですよ。若いほうがいいに決まっている競技なんですけれども、新田選手は、子どもに紙で作った金メダルをかけられたときに、もう4年間頑張ろうと思ったんですね。

そして4年後。昨年、ピョンチャンパラリンピックに出場、2種目にエントリーされました。1種目は銀メダル。金メダルは取れませんでした。私も現地に行っており、もうよく取ってくれたと、銀メダルで十分というふうにして、「新田よかったね」「もう、よくやったよ」って声をかけましたが、「はい」と言いながら、笑顔が満面の笑顔じゃないんです。最初の種目は銀。その後の2種目は、ピョンチャンパラリンピックの最終日、最終種目の10キロクラシカルという、これが終わると、閉会式という、ピョンチャンパラリンピックのフィナーレとなるレースでした。

僕もメインスタンドで応援してましたけども、最初、直線で走っていくんですが、同じ所、3周するんです。右に曲がって、3周同じコースを滑るんですが、新田選手は直線に出てって、最初の右カーブで転倒しました。転んだんです。これ、転ぶっていっても、スキ

ーおやりの方はご存じのように、転んで立ち上がるって、大体、大変じゃないですか。ましてや、新田選手は左手がありません。ストックは右手にしか持っていないので、右手1本で転んで立ち上がるのは、ものすごく大変なんです。レースは大きく差を付けられてしまいました。僕は、銀を一つ取っているんだから、よくやってんだから、いいんだ、完走してくればいいんだという思いで見えておりました。1周目は駄目でしたが、2周目はなかなかで前とは詰まってきたかなって、少しは前のほうに行ったかなという感じがありました。3周目に入ってから、山なんですよ。向こう側が小山になってまして、その所でグングン、新田が追いついていって、ええっていう感じで、第3コーナーのときに、彼は先頭の選手が間違いなく見えていて、その最後のカーブを曲がって直線に入ってくるときに、先頭と並びました。それで並走してって、最後の10mで新田が抜き返し、1位でゴールしたんです。バタッと倒れ込んで、少しも起きなかったんで、死んだとは思いませんでしたが、もう相当苦しそうで、大変だ、大丈夫かなと思って見ていました。新田、見事に、二つ目の金メダル。3歳のときに失った左手を数えるのではなく、残された右手、両足で懸命に頑張っておじいちゃんを喜ばせよう。子どもを喜ばせようの一念で、二つ目の金メダルを取ったのです。そうした世界が、我々に感動を呼ぶんですよ。

日本人だけでなく、2016年のブラジルのリオパラリンピックで活躍した外国の選手の話も一つ、したいと思います。紹介した日本の3選手は、みなさん後天性の障がいですね。村岡選手は病気、成田選手はけが、新田選手は事故です。彼は先天性の障がいを持った卓球の選手。もともと両手のない選手です。さっき画面にも出ましたが、両手がない選手はどうやって卓球をやるかという、ラケットを口でくわえますね。口でくわえて卓球をやりま。それだけだって、初めて見ると、すごいなって思いますが、見慣れてくると、全然、すごいとは思いますが、最初の、おおっとってというのは、全くないんですけど、それでも、すげえなって思っています。それだって、すごいけども、サーブはどうやるんですかね。僕、ピンポンしかできませんけど、両手があ

るから、右ききで、左手でこう上げて打つじゃないですか。両手がないんですから、どうやってサーブのボール上げるのか。それは、足の親指と人さし指の間にボールを挟んで、ポンと上げるのです。それで、口で打っていきます。もちろん、変化球も打ちます。もう、びっくりしちゃいますよ。

そうした、別に卓球の選手じゃなくて、水泳の選手でもいっぱいいます。私も東京ガスのサラリーマンやっていた時、上司からいろんなこと、無理な目標を「これやってこい」って言われて、こんなの無理ですよなんて思っていましたけど、そういうのを失われたものを数えるのではなく、残された機能を最大限生かして頑張っている彼ら姿に触れると、あれができない、これができないって言ってる自分が、情けなくなります。

彼らから、我々健常者だって勇気もらえるし、さらに、健常者だって同じことが言えるんですよ。時々、年取って、「若いときはあれができたんだよな。でも、最近できなくてさ」って、失われた若いときのこと言って、酒飲んでる人、結構、いるんですよ。だから、健常者も同じなんですよ、これ。健常者にも言える。失われた若いときのことはともかくとして、残された人生の中で、今日が一番若いって言葉があるんですよ。だから、今日を大事にすればいいのに、どうしても昔はこうだったみたいなの、失われたものを数え続けてる。彼らから、そういうことじゃいけないってことを教わること。これが、一つの大きいパラリンピアンから得られる、我々にくれる勇気、感動だと思います。

今、申し上げたことがオリンピックとの違いなんです。パラリンピックは、何が魅力かっていうと、パラリンピアンの方を通して、心のバリア、障がい者に対する心のバリアや物理的なこと、後でちょっと申し上げますが、物理的なバリア、ないほうがいいよねっていうことを気付かせてくれるし、それから、今言った、人間の可能性って無限じゃないかなっていうふうに思わせてくれる。そうしたことを気付かせてくれるのが、パラリンピックであります。私はオリンピックも大好きです。オリンピックは魅力的ですよ。頑張れ日本。メダルいっぱい取ってほしいし、頑張ってほしい。オリンピックは、スポーツの祭典。平

和の祭典として、素晴らしいと私は思います。と思いますが、パラリンピックも同じようにメダルの数を競って、日本は何位だとか、何個取ったなんてやってるのは、違うんじゃないかと思います。オリンピックがスポーツの祭典、平和の祭典ならば、パラリンピックは、パラリンピアンの方の力を通じて、世の中をどうしていこうか、共生社会にしていこうよという、社会変革の祭典にしなければ、パラリンピックはもったいないと思いますし、オリンピックと同じようにメダル競争だけをしてるであれば、私は、パラリンピックはもったいなさすぎると、そのぐらいの魅力があるというふうに思いますが、皆さま方はいかがでしょうか。次にまいりたいと思います。

日本が2度目のパラリンピックをやるんだっていうことを申し上げたい。「日本障がい者スポーツ協会」は1965年にできましたが、65年にできたっていうのは、64年に何かがあったからできたわけです。64年にあったのは、東京オリンピック。10月10日の開会式ですが、その後、11月4日から5日間、東京で第1回目のパラリンピックが開かれたことは、私はこの世界に来るまで知りませんでした。でも、外国人がしょっちゅう来て、いろんな話をすると、何にも知らない私に外国の人が、日本で、世界で初めて2度目のパラリンピックやるんだから、東京には期待しているよっていうふうなことを、来る人来る人が言っているような気がしたんです。そこまではっきり聞き取れるほど英語力があるわけじゃないんですが、何か言っているような気がするんで、事務所に戻って、「そう言ってるような気がしたけど、そうなの」と聞きました。「そうですよ、2度目ですよ」「2度目っていつやったの、1回目」「1964年」「いや、1964年はオリンピックだろ」「いえいえ、その後パラリンピックもやったんですよ。高橋さん、そんなことも知らないでこの協会来たんですか」って言うから、そいつに、「それを知ってるのは、この協会のやつだけで、ほかの日本人で知ってるやついない」って言い返したんです。それぐらい知らなかったんですが、世界の人は知っているってことなんです。

ここが大事なんです。世界は2度目だと見ていて、日本国民がそれを知らないでやってしまおうということでもいいんでしょうかっていう

ことなんです。ここがポイント。日本と世界との差の1番目。後でまた申し上げます。ただ、そういう意味で、2度目なんですという事で、世界はそう見ていることを申し上げて、あともう一言だけ。このときに、パラリンピックの名誉総裁をされた方が、今の上皇様なんです。当時の皇太子殿下。上皇様はそういった経緯もあり、ものすごく障がい者に理解があります。そうした意味では、本当にありがたく見守っていただいたなというふうに思います。当時の皇太子殿下がおっしゃったから、当協会ができたんです。

それはなぜかという、日本人選手の53人は、全員住所が病院かりハビリセンターだったんです。外国の選手は、全員住所が自宅で、明るく自立してたんです。それをご覧になった皇太子殿下が、日本も早く障害のある人が、社会的に自立して明るく生き生き生きられるようにしてほしい、というふうにおっしゃったんで、大変だと思ったのが、当時の厚生省。主管官庁の厚生省が、65年5月にすぐに協会を作りました。最初の会長は、厚生省の事務次官がなられました。ということで、なんで「障がい者スポーツ協会」ができたかっていうことを申し上げたかったわけです。そして、2度目のパラリンピックであることを、ぜひ、心に留めていただき、次に行きたいと思います。

これは、協会のスポンサーですけれども、下に書いてあるのが、「障がい者スポーツ協会」のスポンサー様、33社。入っていただいた順です。左の上から順番に入っていただいて、最近では、イオン様。千葉でいえば、イオン様に入っていただいて、イオンモールでいろんなイベントも最近、されているんじゃないかなと思います。応援をしていただいでお

「日本障がい者スポーツ協会」加盟競技団体数と
「東京2020パラリンピック競技大会」競技数

日本障がい者スポーツ協会	79競技別・統括団体	オフィシャルP33社
東京2020パラリンピック大会	22競技	ゴールドP19社、 オフィシャルP32社、オフィシャルS17社

日本障がい者スポーツ協会オフィシャルパートナー
(JPSA=Japanese Para-Sports Association) (2019.7.1現在)



Copyright © 2018 Japanese Paralympic Committee. All Rights Reserved.

ります。この方々に感謝を申し上げたいだけではなくて、一番上について一言申し上げて、このページを終わりにしたいと思います。「障がい者スポーツ協会」に加盟しているのは、79つありますよね。79の競技別統括団体のことです。東京パラリンピックは22競技とあります。つまり、東京でやる22競技。そのうちの4競技を千葉で、先ほど貞石さんがおっしゃったように、やらせていただきます。22競技はパラスポーツ全体の3分の1ぐらいですよ。したがって、22競技がパラスポーツの全てではありません。地域では、他にいろんなパラスポーツをされている方がいらっしやると思います。パラリンピック競技イコール障がい者スポーツではありません。それは、全体の3分の1ぐらいです。

なんで22競技しかやらないんだ。オリンピックもそうですけれども、開催国、たくさんいろんなのやりたいんですが、たくさんやると日数がかかりますね。それから、外国からお招きする選手や関係者が増える。お金がかかるってということなんです。お金がかかりすぎると、それぞれの都市、国民が、そんなにお金をかけてまでオリンピック・パラリンピックやる価値あるのかということになるので、限られた予算というか、決められた範囲の中で、できるだけ多くやる。つまり、22競技というのは、世界中で競技人口が多い、たくさんやる国が多いっていいですかね、やる国が多いものを参考にしながら、22に絞っているわけです。そうしないと、選手たちはいいけれども、お金がかかって、實際上、長い意味でオリンピック・パラリンピックを続けるのは難しいということもあるということで22競技なんです。他にもいっぱいありますよ。パラスポーツの中で、一番競技人口が多いのはフライングディスク。日本においては、一番多いんですけど、それは置いて。そうした意味で、全部じゃないということをおっしゃって、次に行きます。

これから四つぐらい、共生社会に関するものの見方、考え方の参考になる事例を申し上げます。一つは、先ほど、貞石さんの資料にもあった、貞石さん、何回も私の講演を聞いていらっしゃいますので多分、気を使われてコメントされませんでしたけど、過去最高のパラリンピックは、ここにもあるロンドンパ

ラリンピック、2012年です。278万枚という有料チケットが完売になりました。リオは86%、チケットの販売だけで決めるわけではありませし、それでも立派ですけど、ロンドンボランティアも素晴らしかった。テレビを見た方も多かった。いろんな良さがありました。そのなかで特筆すべきなのが278万枚の有料チケット完売なんです。

それはそれとして、このロンドンオリンピックでは日本選手、大活躍したんです。昨日の試合で勝ったボクシングの村田選手。負けたら引退の覚悟で、昨日、勝ちました。彼は、ロンドンのオリンピックの金メダリストです。伊調さんどうでしょうか。引退されるかもしれませんが、伊調さん、吉田沙保里さん、金メダルでしたね。それから内村航平さん。これも、この前出られた世界選手権に今回選ばれなかった。7年経つ時も流れたかなと思います。ロンドンでは、金メダルも銀メダルもいっぱい取った。なでしこジャパンの澤穂希さん。あれから7年経つとお母さまになられて、テレビコマーシャル出てらっしゃいますけど、澤さん。なでしこジャパンは銀メダル。女子のバレーボールも頑張っって銅メダル。3位決定戦は、日本と韓国だったんですよ。

いっぱいメダル取った。38個。史上最高のメダルを取って、日本に帰ってまいりました。国民も大喜び。8月20日に、銀座三越の前、今でいうと、GINZA SIXの中央通り。あそこをパレードいたしまして、JTBが用意した赤いバス。そして、赤いブレザー、白いパンツ姿の選手たちが、集まった50万の人たちに大きく手を振りながらパレードをいたしました。素晴らしかった。それがポスターにもなって、いろんな所に貼られたし、マスコミも大変素晴らしいと追かけました。

ただ、これがまずかった。こんなことやってしまった日本。なぜ、まずかったのか。大学でこの話をするとき、担当教授からここで必ず学生に、なぜだと思っかって聞いてくださいねって頼まれるんですけど、ここでそんなことやったら、二度ともう東京ガスは使われないとか言われちゃうから、それはやめて、答えを先に申し上げます。8月20日にパレードをやったんですけど、パラリンピックは8月29日からの開催だったんです。パラリンピックで日本の選手がこれから頑張ろうとしてい

るとき、そんなことに関係なく、オリンピックの選手だけでパレードをやって、それをおかしいと思わないんでしょうか。

ちなみに、イギリスではどういうふうにやったかという、2012年、ロンドンのオリンピックが終わっても、何もやりません。イギリスも史上最高のメダル取ったんです。でも、何もやりません。3週間たつてパラリンピックを2週間やって、全部が終わった後に、オリンピックとパラリンピック合同でパレードをやりました。これが成熟した国の基本なんです。日本はオリンピックの選手だけでパレードをやって、おかしいと誰も思わない。マスコミも含めて。

もう1回チャンスがあったんです。先ほど、貞石さんがおっしゃった。2012年のロンドンパラリンピックで、日本の女子が団体競技で初めて金メダルを取りました。澤さんがキャプテンを務めた女子サッカーだって銀ですよ。女子バレーボールだって銅だったんですよ、オリンピックで。パラリンピックで女子が金メダルを初めて取ったんです。ゴールボールという競技で。ちょっと待てと。女子サッカーだって銀じゃないか。女子バレーだって銅じゃないか。それなのに彼女たちは金メダルを取ったんです。でも、これはまずい。あの時は悪かった。戻ってきたら、またパレードやんなくちゃまずいんじゃないのと思った国民がいないんですよ。だから、彼女たちは、成田に戻ってきて、成田から福岡と大分の選手が多いので、そのまま乗り継いで、福岡に降りて帰るしかなかった。それを誰もおかしいと言わない。

2012年にこれをやっちゃったんですよ、8月に。東京って決まったのは、2013年の9月なんです。プエノスアイレスで、2020年はどこでやるかを決めたんです。その1年前なので、投票権を持っている人たちは、立候補している国をよく見てるわけですよ。その中で、日本は、投票する1年前、2012年にオリンピックの選手のだけでパレードやっちゃったものだから、パラリンピック関係者から、みんな心配の声が上がった。日本という国は、オリンピックはうまくできるだろ。だって金はあるし。金がないなんて言えません。GDP世界3位ですよ。アメリカ、中国、日本の順だから、日本がお金がないなんて言ったら、4位以下の

国はできないじゃないか。戦後70年間、一度も戦争をしていない。先輩たちの努力、素晴らしい。サイバーテロはいつでもどこの国でもありうるけど、暴力テロは島国だから水際で止められる。いいところはいっぱいある。オリンピックはできるだろう。

心配なのはパラリンピック。この国は、オリンピックが終わったら、ああ終わった。さあ仕事。パラリンピックを忘れちゃう。パラリンピックは、世界中から180カ国、4,400人の選手が来ます。その選手が来た途端に、日本は、仕事、仕事。そういう国で、自分たちのことを忘れちゃうんじゃないか。そういうところでパラリンピックをやらしていいのかっていう心配が、ドツと出たんです。

でも、今、何が問題だかお分かりになりますかとい言ったときに、私のほう、グリーンと皆さんのお顔が初めて分かったっていうぐらい顔が上がったわけですよ。今だって分かんないんです。なんでパラリンピックと一緒にパレードをやらなかったのかが。あれだけ貞石さんがパラリンピックを千葉でやっています。こうおっしゃってれば、ヒント満載なんで、僕は、貞石さんが言ったからこれかって、こう思う人が多いかと、正直、思いました。でも昨日の神奈川のある市でやった講演と同じ反応ですから、パラリンピックの認知度ってまだまだなんですよ。だから、呼んでいただいたと思うんですよ。私の理想は、こうした話で呼ばれなくなる。共生社会分かった。もう分かってる、うるせえな、みたいになること。そうなることが理想なんだけど、いまだに講演でしゃべってくれと言われることが多いんです。私、講演は仕事ではないんです。これは、東京ガスの縁があったから来てますけども、基本的には、メダルをたくさん取らなくちゃいけないし、全競技満員やらなくちゃいけないし、選手団のユニホーム決めなくちゃいけないし、アーカイブってレガシーをどう残すかもやらなくちゃいけないしって、そういうのが仕事なんですけども、こндаけ呼んでいただけるっていうことは、パラリンピックはまだまだだから、お声をかけていただいているっていう意味では、喜んでやってまいりましたけど。喜んでいいのかわいのか、分かんないような状況なんですよということで、まだまだパラリンピックの理解は足りな

いってのが実情です。

高橋は口がうまそうだから言ってんじゃないか。いや、国も心配しているんですよ。これ、東京オリ・パラは、2013年に決まったんですけど、15年のときに「国際オリンピック委員会」と「パラリンピック委員会」に同じ大会開催基本計画を出しました。これって、立候補の時よりちょっと詳細なやつを、開催が決まったら出すんです。その計画では、パラリンピック重視を前面に打ち出し、「パラリンピックの評価は大会全体の評価を左右すると言っても過言ではない。パラリンピックの評価、成功は極めて重要」と繰り返し書かれてるんです。なぜか。世界が心配しているからです。オリンピックの成功が大事って書いてないんですよ。なぜか。世界は心配してないから。東京でオリンピックがうまくいかないなんて、心配してないんですよ。唯一あるとすれば、天候ですね。地震とか。そこばかりは、もう、自然災害はしょうがないけれど、それ以外は心配してないんです、世界は。心配しているのは、パラリンピックなんです。だから、こう書いてあるんです。ただ、こう書いても、まだ駄目だった。

安倍晋三内閣は何をしたか。2016年にパラリンピックの成功なくして東京2020大会の成功なして、この言葉を閣議決定したんです。それは、パラリンピックに国民がついてきてないから。だから、都知事もお好きかどうかは別として、前の舩添さん、今の小池さんも、パラリンピックよと言いつぎるくらい言ってますね。森田知事も、きっと。熊谷市長はまして、パラリンピックとおっしゃる。それは、こうした背景をみんなご存じだからです。熊谷市長と最初にお目にかかったときに、「ひどいよね、ロンドンでのオリ・パラで合同パレードやらないって」と、憤っておりました。「日本では、オリンピックだけでやったの、あれは問題だよ」というふうにおっしゃった。だけど、そのぐらいパラリンピックって言わないといけないう認識なんです。

それでも、まだどのぐらいかという、この前、スポーツ庁長官の鈴木大地さんですね。桜田さんが、ちょっと短くてお代わりになって、カムバックした2回目のときの最初の日の記者会見で、記者から、「パラリンピックの盛り上がりについて、長官はどうお考えですか」

って聞かれました。長官は、「率直に申し上げて、オリンピックと比べるとパラリンピックの盛り上がりはまだまだだと認識しておりますので、私はパラリンピックの成功に向けて全力を尽くしたいと考えております」というふうに応えられました。みんな、長官とか国は正しく分かっていますよね、状況を。パラリンピックはまだまだなんですよ。ただし、千葉はパラリンピックで4競技、オリンピックも3競技開催されます。素晴らしく、こんなに引っ張っていただいていますけれども、千葉の盛り上がり、日本全体の盛り上がりでは決してないという状況でございます。引き続きお力を貸していただきたいと思います。

チケット完売と、全競技会場の満員という目標は、先ほど貞石さんがおっしゃいましたから、もうくどくとは言いませんけど、ぜひ、お願いします。ロンドンではチケットは完売しましたが、全競技会場の満員にはなりません。ええ、チケット買っても行かないの。そうです。売れ残ったのを、例えばですけども、組織とか企業に買ってもらうと、分かりやすく言えば、分かったよ、買ってやるよというふうに、100枚買っていただいた。全競技会場の満員ということは、日本戦だけじゃないんですよ。知らない国同士の、知らない競技の、平日の10時からの試合も満員にするって言うことを言ってるんですからね。そのチケットが売れ残って、どっかの企業で買ってもらうと。分かった。社会的責任だと、ロンドンが270万全部売れたから、買ってやるよって買っていただいた。ある会社が100枚買っていただいた。それが火曜日の10時の、よく知らないテコンドーの幕張の試合だったって。知らない国同士の試合が10時からある。それが売れ残った。100枚買っていただいた。火曜日ってというのは、毎週、経営会議なんだと。テコンドーも大事だけど、先週の売り上げが悪いんだ。それどころじゃないんだ。うちがつぶれたらどうするんだっていうんで、100枚もう買ったんだから、社会的責任は果たしたんだと社長がおっしゃると、100枚のチケットは完売してるんだけど、秘書の引き出しの中に100枚あるもんだから、会場に行くと100席空いてるっていうことになっちゃうんですよ。したがって、チケットの完売と会場満員は違うんです。それがあから、ID

登録を個人でして、ご自分で買ってくださって、今、協会も言ってる。そこに一番大きい理由があるんです。だから、売れ残ったらどうするなんて考えてる余裕がないんで、ぜひ、個人で買っていただいて、見に行っていたきたい。

会場満員にしたい理由は二つです。一つは、選手へのおもてなしと、我々が感激をもらえることですね。180カ国、4,400人の選手が、遠い日本という小さい国に来るんです。それが、1回戦で知らない国同士の試合で、よく来てくれました日本に、というおもてなしをする。すし、天ぷら、すき焼きじゃないんですよ、おもてなしは。選手は、そのために来るんじゃないんです。試合しに来るんです。4年、8年と積み重ねて、その1回戦で負けるかもしれないけれど、その試合のために来てるんです。それによく来てくださいました、日本へ、千葉へ、幕張へというのであれば、会場しかない。もちろん、近いから成田に迎えに行ってもやれよ、毎日って。そこで大きく選手を迎えてくださる方はありがたいんですけど、そうじゃない方は、試合会場しかないんです。おもてなしをしていただきたい。見ていただければ、必ず感動をもらう。さっきのように、ということが、一つ。

もう一つは、例えば、幕張でシッティングバレーがありますよね。これ、適当に言ってるんですからね。メモして火曜日の10時の試合買わなくちゃとか、書かないでください。これ、仮に言ってるだけ。仮に火曜日の10時にシッティングバレーの試合で、聞いたことないアフリカの国対南アメリカの聞いたことない国が、1回戦で当たったとする。そうすると、そのアフリカの国は、パラリンピック競技で予選を勝ち抜いたの競技は、それしかなかったとする。そうすると、その国の国民は、その試合を見るためにテレビを点けるわけですよ。全世界の50億人がテレビを見ることを前提にすれば、インフラ整備になっていると言えます。世界の人口70億の7割ぐらいが見ること前提に、インフラ整備が義務付けられて、お金をかけて日本は世界のインフラ整備してるんですよ。そしたら、そのアフリカの国にも届くでしょう。火曜日のその試合をこうやって見て、頑張れよってその国民が応援してたときに、ふと見た幕張会場がガ

ラガラだったら、なんだこの国はって。うわさでは日本は障がい者に冷たいとは聞いてたけど。ひどい国だな、これはって。目の当たりにされちゃうんですよ。その国の選手は、2020年大会でその競技にしか出てないとすると、これからずっと2020年パラリンピックっていうと、その画像ばかりが出るわけです。もう、取り返せませんよ。いえ、日本はそうじゃないなんて言ったって。

日本は障がい者に冷たい国だと思われているようですが、そんなことないじゃないですか。シャイだし、どうやっていいか分かんないんで、時々質問が出るんです。何やったらいいでしょうかと。答えは簡単。自分でチケット買って、会場で知らない国同士の試合で、よく来てくれましたと言ってくださいと。それが一番です。今やるのは。ぜひ、お願いしたいということを上げ、これだけで1時間以上言えちゃうんだけど、次、行きます。

高齢化とセットです。障がい者の問題というのは、高齢化の問題とセットなんです。先ほど、千葉の高齢化の数字も出ておりましたけれども、障がい者、車いす＝高齢、それだけじゃないんです。具体的に申し上げます。長野の善光寺に行かれた方、いらっしゃると思いますけど、お寺っていうのは、階段が多いんですよ。すると、車いすの人、行けないじゃないですか、なかなか。善光寺は1998年の長野オリンピック・パラリンピックのときに、本堂の所までスロープで行けるようにしました。本堂の所に行くスロープの所に、車いすのマーク。ここ、車いすの方どうぞってなってるんです。私、4、5回行ってんですが、お参りというより、そこを見に行っているんです。どういう順番で利用されているか。一番使う人、若夫婦。赤ちゃん連れの若夫婦が一番。昔でいうと、乳母車。今でいうと、バギー。赤ちゃん用のベビーカーかな。要は、乳母車、あれが一番なんです。二番目、よちよち歩きの子ども。階段に足が引っかけなくて登れないけどあそこなら行けるんです。三番目、高齢者。手すりがありますから、それを伝って本堂に行ける。そして最後、四番目が車いすなんです。つまり、スロープを作る＝障がい者とか高齢者じゃなくて、いいものは、みんなにとっていいってことなんで

すよ。

今、駅ではどんどんエレベーターを作りますけど、よく見ててください。エレベーターで車いすの人がしょっちゅう乗ってるか。いやいや。たまに若者でずうずうしいやつも、おまえなんて乗らなくていいってやつも乗ってるっていうのも問題ですが、赤ちゃん連れのご夫婦がすごく多いですよ。そしてお年寄りの方ですね。したがって、車いすでの利用ばかりじゃないんですよ。エレベーターもそう、スロープもそう。障がい者やお年寄りにいいものは、若い人にとってもいいもので、世の中、全体にとっていいものだっていうことなんです。それを、パラリンピックは気付かせてくれるんです。オリンピックでは、なかなかそうはいきません。スロープの話から、高齢化から、若い赤ちゃんの話までなんて、いくらおしゃべりのやつだって、なかなかそこまで持ってけない。でも、そういうことなんだ。これが、また魅力なんだということですよ。

障がい者の人口。これ、いて当たり前という話をします。障がい者はいて当たり前。940万人、障がい者手帳持っている方がいます。一親等の方が2人ずついれば、近い親戚、近親者の方は2,700万人。国民の4.3人に1人です。したがって、今日100人いらっしゃるとすれば、障がい者手帳を持っている人、もしくは、家に帰ったら障がい者手帳のある方、手を挙げてくださいって言ったら、25人、手が挙がらないと、私は今日、日本の平均とは違う、極めて変わった集団と話をしていることになる、ということになるんですよ。したがって、4人ぐらいいたら、そのうちの1人、必ず障がい者が身内にいないとおかしい。いて、当たり前なんです。

JR東日本さんの部長以上の方、社長、会長を前にした講演でこの話をしました。質問のときに、一番後ろに座ってる女性。多分、部長さんだと思う。手が挙がって、「今日、高橋さんの講演でびっくりしました。障がい者はいて当たり前。私は本当にびっくりしたし、感激いたしました。今日、初めて言います。私の娘は障がい者です」とおっしゃったんです。そこから、質問しますっていうことだったんですが、私は、それを聞いて感激しましたね。口で言うのは簡単ですけども、います

よ。いて当たり前なんだって言いながら、ご自分で社長や会長がいる中で、うちの娘は障がい者だ。初めて言いますって言える勇氣。素晴らしいと思います。その後、清野さんという会長も、すごく喜んでおられました。ご一緒にお茶を飲んでいたとき、「うちに素晴らしい社員がいる」「今日は、高橋さんの話も良かったけど、それ以上に、あの社員がよかった」とおっしゃっていました。「私も、そう思う」というふうに申し上げました。

私が言いたいのは、障がい者がいることが問題なんじゃなくて、障がい者がいると言えないことが問題だということです。パラリンピックが来る前のことはいいですよ。失われたものは数えなくていいんです。失われたものを数えるんじゃなくて、パラリンピックが来ると決まった後、また、今日以降、日本をそういう「障がい者がいて当たり前」と言える社会にするかどうか。ここが決め手だと、私は思います。

少し暗くなってきちゃったんで、明るい話にします。時間が非常に厳しいので、スポーツをポンポンと言っていきます。でも、3時5分まででしたよね。何とかします。パラスポーツの特徴は、障害を理由に諦めるのではなく、どうしたらできるのかという視点で、ルールや用具を工夫すれば可能にすることができるということにあります。いくつかの工夫は必要なんで、ちょっと申し上げます。競技でのクラス分けってというのは、同じ障害のレベルの人で競争するためのもので、目の見える人と、見えない人が走ると、普通、目の見える人のほうが有利じゃないですか。足のある人となない人じゃ、普通は足のある人が有利だから、そうやってみんな、足があるとかないとか、目が見える見えないとかで、同じ条件にそろえていきます。それがクラス分けです。

リオオリンピックの100m男子陸上。誰が優勝したかというのと、ジャマイカのウサイン・ボルト。金メダル1個。それに対してリオパラリンピックの100m男子陸上は金メダル16個。障害を16種類のクラスに分けたってことです。じゃあ、全部を16種類に分けてるかというと、そんなことはありません。二つしかクラスを分けないのがあります。100mが一番多いんですけど、クラスを分けてやるんです。だから、

公平なんだなというふうに思っただければいいと思います。

競技用具も少し工夫があります。足が悪いんだったら、バスケット、車いす乗ればいいじゃないかとか。高桑早生（さき）選手は義足ですね。それから、一番有名なアーチェリーの選手は、スペインの女子選手で、車いすに乗ってアーチェリーやりますけども、オリンピックにも出場して、パラリンピックにも出ました。オリンピックではメダル取れませんでしたけど、パラリンピックではメダル取りましたね。そういうふうに、障がい者だから何もオリンピックに出られないわけではありませんよ。ということでございまして、この選手は、手が動かないから口で弓を引いてますけど、こうしたことをやればいい。ちょっと工夫をして認めているということですね。

柔道は、誰がやってもいいんですけど、パラリンピックの場合は、視覚障がい者ですから、組手の際、襟がどこにあるか分からないので、襟を掴んだところから始めます。あとは、全部同じ、とそういった工夫ですね。車いすテニスも、ツーバウンドまでで返球。そんなことをずっとやってたら、絶対勝てません。世界一になった選手はワンバウンドでの返球を多用、じゃないと勝てませんが、ツーバウンドでもいいということですよ。

次は、視覚障害の方が走る競技です。マラソンですけれども、ここも工夫が必要なんです。白いユニフォームの選手、全盲の和田選手ですね。右側のオレンジ色のユニフォームの方がガイドです。目の見える選手がガイドとして走らないと、42.195キロ、健常者と同じ距離走りますので、ガイドがいないと走れませんから走りますけど、問題があります。この和田伸也選手。42.195キロを2時間30分で走ってまいります。皆さん、目をつむって5m先まで走ってくださいっていったって、歩くのだって怖いでしょ。42.195キロ、2時間30分で走ってまいります。全盲ですよ。100mを17秒平均で走るんです。今、僕なんか腹出ちゃって、一生懸命やったって無理なのに、そういうふうには走ってまいります。でも、選手は目の見えるガイドが横にいないといけないんで、問題は、2時間30分で走ってこれる目の見えるガイドがいらないんですよ。それが問題なんです。そこでルールを工夫してまして、目

の見えるガイド側は、20km地点で1回代わっていいことにしました。和田選手が代わってしまったらハーフマラソンになっちゃうから、そうはいかないんですよ。和田選手は走り切ります。つまり、障がい者は常に劣っているということじゃないんだと。障がい者のほうがすごいから、健常者側のルールを工夫しないと、障がい者の能力が発揮できないということもあるんだなってことなんです。

先ほど、千葉の貞石さんのお話にもありましたように、東京パラリンピックは22競技あり、千葉では4競技が開催されます。ぜひ、千葉のを見ていただいて、余裕があれば、東京にも来ていただきたいと思います。

これも貞石さんの資料にありましたが、幕張でゴールボールの大会がありますから、見ていただければと思います。ちなみに、一つだけPRすると、9月28、29の幕張は、一夜城じゃなくて二夜城ぐらいですね。この試合のためだけに、あのイベントホールに、本番と同じ会場を作ります。2日経った夜、全部、撤去。値段は言いませんけど、高いんですよ、あそこ。2日間だけのためにやりますから、本番見れる余裕ない、余裕はあるけど、その前に1回見といて、本番に備えようっていう人は、これを見ていただきたい。本番とどこが違うのかというと、二つあって、参加国は本番よりは少ないですね、まず予選、試しにやりますから。もう一つ、本番は有料ですが、これは無料。この二つが違うことを申し上げて、次、行きたいと思います。

ラグビーワールドカップが盛り上がってまいりますけども、車いすの世界一決定戦も3年前から企画して、東京体育館でやります。ご関心のある方は見てください。

ここで、心のバリアフリーについて申し上げます。CMを見ていただいて終わることにします。二つ申し上げます。一つ、子どもたちをすごく大事にしてるってことなんです、私たちは。この写真、車いすラグビーです。車いすラグビー、この写真は、新宿小学校でやったときの体験会の写真なんです。車いすラグビーと車いすバスケットの選手は、同じ足に障害があるんですけど、障害の種類が違っていて、車いすバスケットの選手は、手に障害はありません。したがって、上半身は自由に動かせるんです。でもラグビーの選手は、手

にも障害がないと、パラリンピックには出られません。普段、遊ぶときは誰がやったっていいんだけど、パラリンピックでは手に障害がないと出場できません。子どもたちの参加したイベントでの質問タイムのことです。選手が、おにいちゃん、おねえちゃんたちができないと思ったことを言ってるって、子どもたちに聞いたんですよ。そうすると、最初はシンとしてるんですよ。5年生とか、6年生が。「じゃあ、おにいちゃんが最初に言おう。君たちのように、つめ切れるかな。さっきから言ってるように、手にも障害があるんだよ。つめ切れるかな、パチンと」。「切れないと思う」。「じゃあ、そういうのを言ってるっていいんだよ」って言ったら、とたんに子どもたちから、ズボンのベルトが自分で閉められないとか、ご飯が食べれないとか、飲み物が飲めないとか、いろんなことバーッと出てきました。「じゃあ、待って。それ、全部書いていって、ここまでね」と。「食べたりすることについては、この後、給食でみんなと一緒に食べて食べるから、そこで見てもらいたんだけど、答えを最初に言うからね」って言って、「おにいちゃんたちは、障害によって指の曲がり方が違うので、自分の指の曲がり方に応じて、スプーンとフォークを工夫して作ってあるんだ。外食するときもそれを持ってって、それで食べる。今日もそれを持ってきてるから、給食のときに見てね」って言って、一緒に食べたりしています。

「つめ切りは、君たちのようにパチンパチンと切れないよね。どうするかというと、大きいつめ切りを買ってきて、机の上に置くんだよ。机の上に置いて、テープは自分で切れるから、テーピングって言って、テープを切って、固定して、そして指を入れて手のひらでポン。ほれ、切れるだろ。きれいだよ」って、こういうふうに見せて、一つ一つやってるんです。そして、最後に言うんです。「おにいちゃんたちは、君たちに言いたいことがある。それは、工夫すれば何でもできるってことなんだ。諦めちゃ駄目だよ。それと、もう一つ。隣の人と比較しなくていいんじゃないかな。つめ切り競争したら、君たちのほうが早いけど、おにいちゃんだって、つめはきれいだよ。隣の子より算数が遅くたって、昨日できなかった問題が今日できれば、それでいいんじゃないかな。自分をほめてあげようよ」という

話をします。子どもたちから、作文がガーッと、やめようと思った塾やめないとか、こう思ってたけどこうしたいっていうのが、ドッと書かれて出てきます。

もう一つ申し上げてCMを見ていただきますけども、この水泳の選手。左側の選手のことを申し上げます。リオパラリンピックでメダルを四つ取った全盲の水泳の選手で、日本で一番メダル取ってるような人。木村敬一選手といいますけど、ちょっと口幅ったいんですが、東京ガスの正社員でございます。65歳まで本人が希望すればもちろん働けます。彼は、大学のときに、中学校と高校の社会科の教員免許を取ってるんです。本当は、学校の先生になりたかったようなんですけど、東京ガスにぜひ来てくれというふうに言って、東京ガスで正社員で迎えて、こうやってくれている選手です。その選手と学校に行って、一緒に給食も食べました。

給食を食べ終わった後、女性の先生、「木村選手がうちのクラスで給食食べてくれてラッキーだよ。質問タイムが少しあるから、質問しちゃおう。木村選手に質問ある子」って言うと、バーンと手が挙がって、「一番得意な泳ぎ、種目は何ですか」とか、「1日どのぐらい泳ぎますか」とか、そういう質問がドーンと出たんですが、そんな中、5年生の女子児童が、「木村選手、好きな色は何色ですか」って聞いたんです。私は先生と目が合って、まずい、答えられないんじゃないかなと思いました。子どもが大好きで、おしゃべりな木村選手は、ちょっと間があったんですが、こう言いました。「おにいちゃんは、生まれてすぐ目が見えなくなったから、今まで、一度も色って見たことがないんだよね。ただ、リオで銀メダルと銅メダルは取れたんだけど、一番取りたかった金メダルは取れなかった。おにいちゃんの一番好きな色は金色だよ」って答えた。ああと思ったんですよ。先生と目が合って、ああとなった。そしたら、すぐ次に男の子が「じゃあ、木村選手、今ここで目が見えたら、一番最初、何見たいですか」って聞いた。木村は、パッと答えました。「七色の虹が見てみたいな」って。子どもには、何を聞いちゃいけないなんてバリアはないんです。終わって帰ろうとしたときに、「黒板にサインして」って子どもが言いました。「いいよ」っ

て応えてあげました。木村は全盲ですから、村っていう字がちょっと読みづらいけれども、何とか読める。子どもたちは「木村選手、リオ残念だったよね、金メダル取れなくて。東京で絶対金メダル取って、ここへ戻ってきてね。僕たちそれまで、ずっとこのサイン消さないで待ってるから、必ず取って戻ってきてね」と言いました。木村は目に涙を浮かべながらうなずいていました。帰る時、階段を下りようとしたら、今度は「僕の肩につかまって」「ずるい、私の肩も」っていうんで、先生が「3段ずつ順番にね」って言いました。

本田宗一郎さんが、こうおっしゃっていました。「大人には、過去があるから、どうしても過去のものの方や価値観で未来を見てしまう。子どもには、過去がないから、常に新しい日本を作ってくれる」と。私たちは、子どもたちが共生社会という、より成熟した日本を作ってくれることを信じて、今日は土曜日ですからやってみせませんが、毎日、体験会とかでこうしたことをつないでいっているということでございます。

最後、外国のCMを4本見ていただきます。最初に出てくるTOYOTAのCMの女性は両足を切断しており、健常者の女性の前で、こういうふうスピーチされました。「私は、皆さんより幸せなんです。なぜかって。ステキな彼の背の高さに合わせて、私は背を変えることができるんです。両足、義足ですから」。

真ん中の二つのCMには、先天性の子どもが出てきます、先天性の障害を持った子どもというのは、国や医学の進歩に関わらず同じ比率で生まれてきます。協会には500人のお医者さんが付いてまして、そのトップの先生がそう教えてくれました。それは、なぜかと聞いても、世界中のお医者さんが誰も答えられない。したがって、世界中のお医者さんが何て答えるかということ、一定比率で生まれていることを、「先天性で生まれてくる子どもは、神様からのプレゼントなんです。そういう子どもが生まれてこない、人間というのは思い上がって、人に対する優しさを忘れてしまうから、それを忘れないように、神様からプレゼント。それが先天性の子どもなんです」。そういうことを知っているから、CMに出すわけですよ。日本がこれやったら、そういう子を食べ物にするのかと言われがちだ。そうじ

やない世界の常識を見ていただきます。最後の1個は、車いすバスケットの練習を終えて、さあ飲み行こうという瞬間ですね。それを見ていただいて、終わります。

(映像) (英語)

車いすバスケットというスポーツを6人でやっていて、飲みに行こうといったときに、5人は足に障害がないから立ち上がって、足に障害のある人が1人だけ車いすで行って、6人で乾杯したという、世界で一番有名な共生社会を実現しようという、会社のメッセージが出るCMです。まさに、先ほど、貞石さんおっしゃった、パラスポーツは障がい者がやるスポーツじゃなくて、障がい者と一緒にやるスポーツにしたいんだと、素晴らしいお言葉だと伺いましたけれども、まさに、このギネスのCMがそういうことでございます。

長くなりました。最後に一言だけ。あと20秒。2の22乗をお願いして終わります。2の22乗。よろしかったら、今日お帰りになったら、ご家族、お友達、ご親戚、誰でもいいんですけど、2人の方に、明日でもいいんですよ。2人の方に、「ぜひ、見に行こうよ。パラリンピック面白そうぞ」と言っていただきたいんです。その人にもう一言だけ言っていただきたい。あなたも、2人にだけ言ってねと。2人にだけ、2人だけを22回つなぐ。2の22乗は419万人になって、必ず全競技会場満員になります。どうか、2人にだけ、その第1歩を踏み出していただくように、2人にだけ、おっしゃっていただくようお願いをしてください。

3、4年の経験しかないのに失礼をいたしました。心からお詫びを申し上げて、終わります。ありがとうございました。